

コミュニケーション能力を考える(1)

―葛藤をへて分かち合う心―

村松 賢一

このところ、ちょっとした「コミュニケーションブーム」である。少なからぬ大学でコミュニケーションを冠した学部が新設され、「コミュニケーション学への招待」といったタイトルの書が相次いで出版されている。言語とコミュニケーションの研究を正面に掲げた学会も最近発足した。新しい学習指導要領が告示さ

れ、精細な文字鑑賞に偏りがちだったこれまでの国語教育をあらため、「話すこと・聞くこと」を重視する方向が打ち出されたこともあり、言語・教育系雑誌は競ってコミュニケーション能力をめぐる特集を組んでいる。中でも注目されるのは、「二十一世紀の日本におけるコミュニケーション教育」(コミュニケーション)

ン研究者会議、九八年五月)、「日本の学校にいかなるコミュニケーション教育が必要か」(異文化間教育学会、同年同月)などのシンポジウムタイトルが示すように、従来、学校教育に関心のなかつた学会までが、その教育の有り様を論じ出した点である。

ところで、ここまで自明のことのように扱ってきたが、コミュニケーションとは一体何なのだろう。とあらためて考えると、意外に定義することが難しいことに気づく。特に、教育の対象としてのコミュニケーション能力となると、急に輪郭がぼけてくる感じをもつのは筆者だけだろうか。そこで、本誌上を借りて、何とかこれからの議論の手がかりを見つけられないか、愚考をめぐらしてみたい。

分かつてもらえない哀しみ

幼稚園の遊戯室で

四歳児のさとし君が大きな積み木を組み立てて何か作ろうとしている。積み木は三種類。長方形のものは

首くらしいの高さがある。正方形は顔より大きい。細長い板は幅が五十センチ、長さが一メートル、厚さ三センチくらいか。今しもさとし君は、その板にまたがって両手をかけ、持ち上げようとしている。どうやら、それを既に積み重ねた積み木に立てかけて滑り台のようなものを作りたらしい。かなり重いと見え、手が滑って板は床に落ちてしまった。その拍子に、片方の手先を挟んだ。「いたー」。さとし君は指先に、はーつ、はーつと息を吹きかける。それを、友達の子が二人すぐ近くでじつと見ている。さとし君は、傷めた指をもう一方の手で押さえながら、「だれか持ってー。だれか」と二人に声をかけた。以下は、その後の会話である(なるべく発話に忠実に再現した)。

男児1 はい(高い声で)。

男児2 はい(低い声で)。

さとし君 ぼくここもつかから、あきくんはここ。上げて。

(三人で板を頭の上まで持ち上げる)

男児1 わっせわっせ。

さとし君 もういいよ。はなしてー(頼む調子で)。

(板を、二つ重ねにした箱に立てかけようとするのだが、何度やってもすべり落ちそうになる。すると、それまで黙っていた幼児が、一段低い積み木を指差して言った)

男児2 いつもここにあるじゃない。

(その間にも、さとし君は同じことを繰り返しては失敗し、だんだん半泣き状態になる)

さとし君 えーん(重い板を必死に持ちこたえながら)。

男児2 ここ(「積み木が高いと板の勾配がきつくなるから滑ってしまうんだよ。低いところなら大丈夫だよ」とでもいうように、同じところを指す)。

さとし君 わー(また落ちる。小さな手で支える。顔が真っ赤になる)。ここにするとちっちゃいから(低いと傾斜がゆるくなつてつまらないから、の

意か)。ここをね、何かでつぶせば、できるの(強い調子で)。つぶしてよ、だれかここへ、何か乗つけてよ。わっ、これがちゃんとしてくれないから(板が滑り落ちるので、立てかけた板の上辺に別の積み木を重しのように乗せて押さえればよいと考えたらしい)。

男児1 はい、はい、はい。(この子は極めて協調的で、正方形の積み木を頭の上まで抱き上げ、よるけながらも懸命に板の端に乗せようとする)

さとし君 まだ!これが乗ったらだよ(自分が板を差し掛けたら、の意か)。ここにつぶして。あきくん、あき、ここに、つぶすんだよ。ちがうの。こ、つて落ちるじゃん。放してごらんよ。こ、落ちるでしょ。ここにね、つけるって僕は言ったの。ここにね、もう、やだー、やるって言ったんだよ。うーん、できないよー。

(もともと無理な相談なのである。厚紙なら端を折つてのり代のようなものを作り、その上に

重いものを置けば固定されるのだが、これは分厚い板である。ついに、さとし君も持ちこたえられず、ばたと落ちてしまった)

さとし君 だからやなんだよ(後はことばにならない。地団太を踏んで悔しがる。その間にも二兎は箱を持ち上げて何とかしようとする。さとし君ももう一度だけやってみる気になる)。ここ、ここ(と指した指が、このとき箱と箱に挟まれてしまった)。あ、いたい!どうにかできないのかな(泣き声)。

男児1・2 いちいの(二人は、なお箱を顔のあたりまで持ち上げてさとし君が板を差し掛けるのを待つ。さとし君がもう一度やろうとしたとき他の積み木を押ししたため、全部ががらりと崩れてしまった)。

さとし君 わーっ(しゃがみこんで泣き出す)。

幼稚園ならどこでも日常茶飯に見られる光景である

う。筆者はビデオ(「きょう、きてよかったね!」岩波映画製作所)でこの場面を見たとき不思議な感動に襲われた。そして、それからというもの、コミュニケーションについて考えるたびに、何とか自分の思いを分かってもらおうと「つぶして、つぶして」と訴え続け、うまく伝えられなくて癩癩を起こし、最後に泣き崩れるさとし君の姿が思い出されるようになったのである。一人より友達と遊ぶほうが楽しい。でも一緒に遊ぶためには、意思疎通を凶らねばならない。しかし、気持ちの橋渡しをするには「ことば」が不可欠だ。でもそのことばはいつも相手に理解されるとは限らない。そのときの、分かってもくれない気持ちほど人間を苦しめるもの



はない。泣きじゃくるさとし君の姿は、他者と社会的な関係をとり結ぶことなしには生きられない人間の宿命的な苦しみを原初的に示しているといえよう。いま、私たちは、いじめ、不登校、中途退学、校内暴力、学級崩壊など数多くの深刻な問題に直面しているが、当の子どもたちの心の根本にあるのもまた、この「分かってもらえない哀しみ」ではないだろうか。筆者には、彼ら一人一人にさとし君の泣き顔がだぶるのである。次に紹介する少年もその一人である。

中学校の美術室で

「好きな先生・きらいな先生」というテーマでの中学生、高校生による討論会を見た（NHK教育テレビ）。その中で、高校を中退し、今は大検準備中という生徒が、次のような中学時代の体験を語った。

「部活で保護者が見学にくるのがあって、で、美術部だったんですけど、で、おれはポスターをやっていて、他の皆は粘土やあって、で、おれはあのーまだ仕上

がってないからポスターやあって、一緒にやるとやっぱりあの作ってるものが違うからっていうんで、女の顧問の先生が、じゃ君は、長い机が前にあるんですけど、ま教卓みたいな、そこでやりなよっていうことになつて、でやあって、で後になつてー、男の顧問がもう一人いるんですけど、お前一体なにやっつてんだと、お前一人だけ勝手になんであそこでやっつてるんだと、で、おれは女の先生に言われてー、ここでやっつてたんですって言っても、や、お前がおかしいんだ、お前は普通じゃねえんだ、お前は一体何を考えてるんだ。だつておれは女の顧問の先生に言われてやっつたんですって言っても、もう聞いてもらえないで、ぱしっともう全然もうカットされちゃう。だけどそれはー絶対おかしいわけでー、なんでこいつはこういうことをしたのかつていうのをー、教師は考えるべきで、それを考えなかつたら人間なんてそんなやっつていけないわけでー、そういうの絶対おかしいとおもうんですけど」。先生の誤解だったのか、ふだんの少年の言動が尾を

引いていたのか。逆に少年が先生のことば、態度を曲解したのか。事の真偽は確かめようがないが、これもよくあるできごとであろう。別の中学生は次のように話す。

「良い先生やったらちゃんと聞いてくれるのや。こっちが黙つとつてもな、何してんのかつて。何か悩みがあんのかつて。嫌いな先生は何も聞かんとな、すぐ怒鳴んのや、俺がちよつとうるさいからつて。こらーとか叫んで来んのやんか。俺のこと何にも知らんで言うのがむかつくのや」。

こんな具合に、出席した中学生は、口をそろえて「先生は自分達の気持を分かってくれない」と訴えるのだった。そこには少年期特有の甘えが無いとは言えず、こわそうな茶髪の高校生の先輩から、「しよせん他人なんだから、そんな全部わかってもらええるわけないんですよ。大体、教師に理解してほしいって言うんですけど、自分が一歩大人になって、自分も教師を理解するべきなんですよ。お互いが理解し合えればそれが

一番いいんですけど、そんなの滅多にないから、向こうが理解してくれないんだつたら自分が理解して接すればいいんですよ。教師にだけ自分を理解してほしいっていうのはただのわがままなんじゃないんですか」とたしなめられる場面もあったのだが、次のようなことばを聞くと、必ずしも中学生たちの発言を一方的だと決め付けることはできないようだ。

「なんか、生徒の気持をわからうとしてー、わかるかわからないか別としてー、わからうとするっていうのが生徒に伝わってくるんですよ。ああ、この先生おれのことわからうとしてるみたいなの、すごく、自分にいよいよっていうか、なんか、積極的にやってくれてっていうのがそれがわかると別に自分の気持が理解されるかされないかにかかわらず、信頼はわきますよね」。

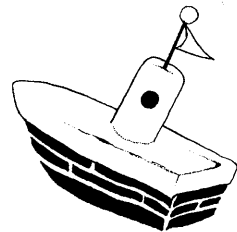
子どもたちは、現在、対教師だけでなく、同じようなコミュニケーション不全を友達や親との間でも抱えているに違いない。多くの不幸なできごとはそのこと

を抜きにしては理解できない。いや、実はそれより恐ろしいのは、教育学者の佐藤学氏の言である。氏はこの二十一年間に五千を超える授業に立会ってきたというが、最近の子どもたちの著しい特徴として「他者への徹底した無関心」をあげている。コミュニケーションがごく狭い範囲の仲間内に限られ、そのサークルの一步外側の人間には何の関心も示さない。クラスに不登校の生徒がいても、誰も気付かないというのだ。筆者としては、コミュニケーションのねじれによる突出した事件より、むしろこちらの方が気になってならない。人と関わらなければ摩擦は起きないだろう。でもそれでは、相互理解は深まらず、人間の成長にとつて一番大事な、他者との葛藤による自己発見や自己変革は到底望めないではないか。

葛藤をへて相互理解へ

ここでもう一度、幼稚園の遊戯室に戻って、その後のさとし君たちの様子を覗いてみよう。積み木が崩壊

してさとし君が泣いているのを年長さんが見つけ、「いい考えがあるよ」と言つて、素晴らしいアイデアを思いつき、結局二段の滑り台を完成させたのである。滑り台といつて



も子どもが滑るのではない。実は、さとし君たちは、だいぶ前から、「ミニ四駆遊び」といって、手のひらに乗るような小さな輪を転がす遊びに熱中しており、斜面とみればどこでもそれを転がして楽しんでいたのである。年長さんが思いついたのは、問題の板をいきなり床に置こうとせず、少し低いもう一つの箱に渡す。これなら角度がゆるいので板はすべり落ちない。そこからもう一枚、板を継いで、同じ高さの箱に差し渡す。こうすると、結果的には、途中で男児2が主張した形と似るわけだが、全体の高さは最初にさとし君

が思い描いた通りになるのである。この新しいコースはたちまちさとし君たちのお気に入りになり、何度も何度も輪を転がし続けるのであった。そこには、もうさっきのしかめ面も泣き顔もない。あるのは、葛藤の末に気持を通じさせた者のみに見られる晴れやかな笑顔だけだった。そして、それを見守っている年長さんもうれしそうな表情である。不覚にもここで筆者は涙を流してしまった。コミュニケーションの語源は「分かち合う」ことだそうだが、園児たちはこのときまさに皆で心を分かち合ったのである。さっきは、分かってもらえない哀しみを味わったが、それを乗り越えれば、こんなに素晴らしい世界が待ち構えているのだ。この成り行きは、子どもたちにはもともとコミュニケーションしたくてたまらない心と能力が備わっていることを示唆している。

この原稿を書いているちょうどその日の新聞（九八・一二・二〇）は、どこもそろって横浜市港南区で、区内三十二校の小・中学生たちが、自分達の手で

いじめを話し合う「子どもフォーラム」を企画・開催し、教師やPTAも含め、五百人の人々が参加して大成功をおさめたと伝えている。何とも勇気のわいてくる話ではないか。

願わくば、これからの教育の中心にコミュニケーション能力（葛藤をへて分かち合う心）の育成を据え、この横浜の小中学生のような、他者との関わりを厭わず、問題を分かち合って解決していこうとする子どもたちをどしどし輩出してほしいものである。その過程で私たち大人もまた自己変革を迫られ、コミュニケーションを共に学んでいくはずである。

（お茶の水女子大学）